

円 と 円

Yen and 円

三 上 隆 三
Mikami, Ryuzou

ABSTRACT

Meiji Government take power and declare all the world that we bring down Tokugawa-Bakufu and produce new coin——call yen the gold of 0.4 monme in weight. 円, the mark of Japan money, is devised in not public but private at early Meiji era.

I コスト無し

本稿シリーズで、以前に述べたことのくり返しになるのだが、慶長五＝1600年の関ヶ原の戦いで勝利をわがものとした徳川家康は、何はさておきといった行動で、翌慶長六年に江戸に小判座（元禄のころに金座）を、京伏見に銀座を設置して通貨としての金貨・慶長小判・同一分判、慶長丁銀・同豆板銀をそれぞれ製造・発行させた。その行動は社会的に如何なる意味をもつものなのか。

貨幣製造・発行という行動は関ヶ原の一戦における勝利をわが手にした家康が、俺は事実上の、天下人になったということを日本全国に告知することなのである。しかも告知のための費用は一切不用なのである。宣伝料無料で貨幣が日本の津々浦々・隅々にまでくまなく徳川家が日本の支配者であることを知らせるのである。したがって徳川の許可なく金貨銀貨を製造した場合には、それを偽造罪として処罰、ひょっとしたらお家断絶？。ともかく堂々と天下御免で相手如何によらず処罰権を行使しうるのである。

このことに関連して徳川にはもうひとつの狙いがあった。伏見城等からも大量の金銀をわがもの顔に豊臣から横奪した流石の家康も、摂津・河内・和泉支

配の一大名に閉じこめた豊臣秀頼の居城・大坂城にある金銀までは手が出せなかった。大坂城の御金藏にはうなると形容しうる金銀＝アンティ徳川戦力が存在しているわけである。したがってその戦力の削減に家康は日夜腐心した。

その一つが父・秀吉の菩提を弔い冥福を祈りなさいとのしらじらしい——秀頼も十分に承知のこととは思いが——アドバイスのカバーをかけてはいるものの戦力削減のために、例えば京都の方広寺（大仏殿）や北野神社の建築をすすめて金銀を浪費させるのである。では秀頼はどのようにして金銀を消費するのだろうか。

先ず後藤本家に依頼してもてる金から必要量と思えるだけの大判金を作成させ、それを市場で売却して通貨の金貨を入手するのである。家康の勧告＝許可!？を得ての行動であるにも拘わらず、直接に小判を製造することは勿論のこと、金銀を市場で直接に売却することも許さなかったのである。大判金の作成という迂回＝浪費を強要したわけである。このことから大判金が貨幣でないことがわかるだろう。そして大坂城の金銀が簡単には使用できないということを知らして精神的に参らせるという意地わるいイケズをしたのである。

さて、徳川政権を倒して成立した明治新政権には豊臣関連現象とは一切無縁であるが、宣伝費なしでの日本の支配者は誰なのかを全国に告知、いな世界中に告知するために造幣権を行使することは慶長初期の徳川政権と全く同じである。

このこともあって明治新政権そのものとして新貨の製造発行を明治2＝1869年ころから本格的に検討に入った。その経過に簡単にふれておくと、明治3年末に銀本位制に決定を見て新銀貨製造に着手するも、明治4年に金本位制との最終決定を見、本格的に金貨製造をはじめることになる。

以下その新貨製造の要点を述べておこう。貨幣名を四進法の両（分朱）を改め十進法の円銭厘にした。10厘＝1銭・100銭＝1円である。そしてそれまでの貨幣形態を改めマル型に統一した。その基本貨幣たる1円金貨の純分は0.4匁とした。

この事実について若干のコメントをしておこう。幕府の四角の事実上の小判

たる万延二分判 2 枚＝一両の純分の 0.365 匁よりも 1 円金貨のそれは重く、新政権の面目をたてることができた。しかしいかに面目がたつといってもその重量差は軽微なものにすぎなかった。しかし禍が福に転じたとでもいうか、このことが江戸から明治への政治的・社会的変動をよそに、物価の連続が確保されて民生の安定＝政局の安定に随分貢献したことになる。

前稿において（331 号 58 ページ）述べておいたように、討幕戦争を完遂するために貨幣司が万延二分判を手本にして明治二分判を製造した。ということはその製法も同然ということでもある。要するに江戸造幣の伝統にしたがって純分に対する雑分として銀を用いたわけである。具体的にいうと

$$\text{明治二分判} \times 2 = \text{一両} = \text{金 } 0.35744 \text{ 匁} + \text{銀 } 1.24 \text{ 匁} \div 1.6 \text{ 匁}$$

となる。しかし新円貨は洋式方法による機械製造であって、当然のことながら雑分は銀ではなくて銅という西欧＝国際的常識にしたがうことになる。この無用になる銀 1.24 匁を当時の金銀比価 1:16 によって金に換算すれば、0.0774 匁の金相当ということになる。

このことから明治二分判 $\times 2 =$ 一両の素材費は金 0.35744 匁 + 0.0774 匁 = 0.43484 匁ということになる。雑分を銀→銅にすることで新円貨製造の素材費が 0.03484 匁軽減されるということである。

かくて幕府の四角の事実上の小判よりも純分が重くて面目を施すことができ、物価の安定＝政局の安定を確保することもでき、新貨製造コストも軽減できて、すべてよし＝^{バンバンザイ}万万歳ということで 0.4 匁の純分をふくむ一円金貨の誕生となるわけである。但しここで留意すべきは、幕府の正貨たる万延小判の純分＝0.5 匁を遂に抜くことはなかったということである。——現在にいたるまで。

Ⅱ 円

漢字の円＝圓には本来的には貨幣とは何のかかわりもなかった。手許にある辞典によれば①まるいこと。まるい形。②数学で、平面上にあるひとつの定点（中心点）から等距離にある点の軌跡。またそれによって囲まれた平面。③まる

くする。まるめる。④満ちて豊である。⑤めぐる。めぐり。⑥あたり＝辺。⑦ボロ出さぬように話をつくろう等々であろうか。

この円という文字に新たに貨幣的意味の添加・貨幣的用法にゆだねたのは、文字の誕生以来の長い経過時間に比すれば極く最近のことに属す。とはいっても、清朝はその全盛期を形成した乾隆帝統治の18世紀のことである。

貿易港として指定されていた中国南部の広州で、主としてイギリスによって大量に紅茶が買いつけられ、その代金として支払われたものは主として当時アジア全域を流通圏としていたメキシコ・ドル銀貨だった。この貿易収支の大赤字がイギリスによる中国侵入のアヘン戦争の原因であることは周知のところであろう。

それはさておき広州より流入の大量のメキシコ銀貨は、コイン面に印刻されている図柄が、解説書によるとメキシコ神話による蛇をくわえてシャボテン上にすわる鷲であるという。ところでおのれの無知をさらけ出すことになるのだが鷲ワシと鷹タカの区別はつかない。したがってメキシコ銀貨上の鳥が鷹だといわれても反論しえないのであるが、中国人はこれを鷹であると断じ、流入銀貨を鷹洋インヤンとよんだ。洋とはヨーロッパ流の円形銀貨を意味する。この鷹洋を中国に持込んだ国がイギリスであり、イギリスを意味する中国語の英が「イン」と発音されるところから鷹洋インヤン＝英洋インヤンともよばれた。

中国における通貨たる銀貨は一般にその形態から馬蹄銀とよばれる銀塊だった。これに対して華南に流入した銀貨の鷹洋インヤン・英洋インヤンが洋の文字の解説の通り円型だったところから、自然発生的に馬蹄銀に対する円形という特徴に着目しての銀円なる語が生まれることになる。やがては、洋銀5枚のことを銀5円と、つまり円は洋銀と同時にその個数をかねる言葉として活用されるようになり普及していたのである。これが既述のように乾隆帝の時代であって、円という文字に貨幣的の用法を添加したというわけである。同時に新生日本を担う明治新政权が世界にひろく俺の存在を告知すべく製造した貨幣名の円にもなったわけである。

明治 32 年に一種のエンサイクロペディアたる『古事類苑』と題する書物が上木された。これには極く当然＝常識にふれるかのように淡々と「一両ヲ一円……ト云フガ如キハ、徳川時代、漢学書生間ノ通語ナリキ」と述べている。後述のようにこの一文は部分的に不正確ではあるが、とにかく一般読書人に「ネー、そうでしょう」と同意を得るかのように発言している。しかし明治中期の人はいざ知らず、現在人の吾々にとっては、具体例もあげることなく、いい放しでは不親切もよいとこ、その実例を探し出す方向すらわからないというのが許らざる読後感である。かくてここから長期にわたる両の通語としての円使用の実例を求めている作業に入ったわけである。

古い表現だが——頭脳水準を示す!!——全アンテナをアメリカにむけて張り、周波数をもそれに合わせて一瞬一刻を争ってアメリカの新知識をわがものにしようとするのが日本インテリのありていだった。ある日本人がアメリカ人——仮に A としておこう——の知識を部分的に改変して、恰も自分の知識であるかのように日本語論文にしたところ、それに注目した別人がこれまた部分的に手を加えて、日本語では駄目で世界的に認められるためにはと英語にして論文を出したところ、これが剽窃論文であると A によって訴えられたという笑えない話を聞いたことがある。ありうることであろう。この事態はパソコン全盛期の昨今でも大差はないだろう。というよりはインテリの基本姿勢は江戸時代から全く同じだったのである。ただ意識を向ける方向・対象がアメリカではなくて中国と変るだけである。

上述のように中国では円という文字に貨幣的用法が新たに加わったという新知識を日本に伝えた最初と思われる——但し現時点においてという条件付。より早い事例文献の発見がまたれる——人物に江戸在野の儒者・蒲坂^{マドカ} 圓がいる。参勤交代で江戸に來た四国は西條藩士の依頼をうけて、藩士の先祖二代の顕彰文作成の依頼をうけた。享和元＝1801 年のことである。

蒲坂は早速に入手早々の新知識を活用して、例えば依頼主の話に登場してくる大判金一枚・小判一枚・銀一枚（43 匁）等のすべてを大判金一円・小判一円・

銀一円と記して依頼の顕彰文を書きあげたのである。これは目下のところではという条件つきではあるが、円前史のはじまりを飾るものであって、造幣局で本位貨幣としての金貨ないし銀貨の製造にあたり貨名の相談で円が顔を出しはじめるのが明治2=1869年であるところから、円前史にはほぼ70年の歴史のあることがわかる。

高野長英といえば『夢物語』を著わして幕府の対モリソン号処置を非難してその忌諱にふれ、入獄したが脱出して諸方に潜伏した。結局は大胆にも江戸に戻っての潜伏中に捕えられ亡くなるのだが、諸方への潜伏先の一つに四国は宇和島の卯之町在の庄屋宅にかくれていたことがある。幕府の知るところとなり、幕吏の来するという前日に門下生に生活の始末をつけるための借金依頼書を作成するのだが、その密書という性格を反映して例えば50両を50円というように、すべの金額を円にて表示した。嘉永2=1849年のことである。ここで高野長英にあえてふれるのは、その円使用が古いためではもとよりなく、彼が当代切つての蘭学者だったからである。というのは本稿P.103で述べたように『古事類苑』がブッキラ棒に「一両ヲ一円……ト云フガ如キハ、徳川時代、漢学書生間ノ通語ナリキ」の一文が部分的に不正確だと述べたのは、何をかくそう高野長英が上述のように蘭学者であるから、漢学書生間と限定するのではなくて正しくは書生間とするのが正しいからである。

『古事類苑』で「一両ヲ一円ト云フガ如キハ、江戸時代、漢学書生間ノ通語ナリキ」との木で鼻を括^{クワ}るとでもいうか、とにかく素気ない一文に出遭った当初こそ、探求の方向さえわからぬと弱気にはなったが、上述の高野長英の例のようにその実例発見に成功すると、あとは面白いように橋本左内・横井小楠・佐久間象山・水野忠徳・木戸孝充^{タカヨシ}・河井継之助・五代友厚・小栗忠順^{タダスネ}・佐々木高行というように次から次へと、いわゆる芋蔓式に面白いように見出すことに成功したのである。それについては拙書『円の誕生——増補版』（東洋経済新報社刊・初版1989年）の参照を願いたく、これ以上はふれないことにする。

上に列記した人物を見ていただきたい。その中には、河井継之助の場合のよ

うに賊軍との汚名のもとに逝去し、国家的逸材を無にしてしまった例もあるが、江戸時代は単なる一書生ではあっても、明治の世に入ってそれぞれの分野で指導者なって大活躍した人々であることは多言無用のところ。

彼等が無名の一書生時代に書生仲間の通語・陰語・駄洒落^{シヤレ}・言葉遊び等々として円を口にしたのであるが、それに共通していることは、その言葉が公儀＝幕府^{ハバカ}を憚るものとの性格である。したがって円という言葉は白日のもとでの使用は全面的禁止＝伏流水のように地下にもぐらざるをえないわけである。ところが幕府という重圧がなくなった時には、彼等とともに地上に湧出し奔流となつて滔々^{トウトウ}と流れ、彼等も各界の名士・指導者に成長していた。その彼等の口口から、新貨幣名と尋ねられて異口同音とでもいうか示しあわせたかのように円がよいとはねかえってくるのである。これは実に上に指摘しておいた70年もの長期の円使用前史の歴史の重さ以外の何ものでもない。

書生仲間の一人であって利口で口も達者な人物に早稲田大学の創建者の大隈八太郎重信がいる。彼は明治2年3月4日に京都御所にて開催された議事院上局（天皇の前で開かれることを意味する）会議の席上で、造幣判事の久世治作とともに大阪からやって来た参与の資格で参加したのだが、彼は「百錢ヲ以テ一元ト定メ」とあえて円ではなくて元と才走って口にし俺は一般書生とは違うのだということを示したのである。逆に云えば誰に聞いても新貨幣名は円で行こうとの大合唱だったわけである。

新貨幣名は無手続同然に円に決まってしまったので、その決定プロセスについての記述文書のあろう筈もないわけである。長期にわたり日本金融学会会長であり、東京商科大学（現一橋大学）教授であり辞典類をも手がけた豊富な人脈をも駆使して、それまでは明治5年2月発生の旧江戸城内にあった紙幣寮火災と明治6年5月の皇居炎上による大政官衙類焼という二度の災禍による明治4年までの貨幣関係重要書類の焼失のために不明だったとの円決定を告げる定説的承認の穴を埋めるものとなるべき文書探求の苦労話を聞いたことがある。しかしその行動が無駄に帰したことは云うまでもない。

田 田 田 田 田 円

1887 1894 1912 1914 1935 1946(年)

「円」の活字形の変遷(文化庁文化部国語課
編『明朝体活字字形一覧』平成11より)

かくで新生日本の顔でもある貨幣名としての円は「新貨幣の称呼は^〇円を以て起票とし、其多寡を論せず、都て円の原称に数字を加へて之を計算すへし」として、明治4年5月10日公布の「新貨条例」によって正式に採用を見るわけである。因に日本貨幣名の圓の略字の円文字の形成については笹原宏之氏の定説的見解が発表されたので、ここに紹介しておきたい(『日本の漢字』岩波新書、2006年、pp.52-55)。

一連の図示した文字に見られるように、正字・圓の記述における労の軽減＝合理化によって口(クニガマエ)の中に員を示す棒を書込んだ田を以て圓を意味＝代用するようになり一般化した。それは既に平安時代にもさかのぼるという。それはさておき時の経過とともにクニガマエの第三画が図のように徐々にせり上り、ついに円に結実したというわけである。

かくて読者を長くひきづり廻してやっと日本が世界にむけて貨幣名として告知した円の由来について述べることができた。残るもう一つの問題は、これまた世界的にも承認されている貨幣マークの¥の由来である。節を改めてこれを論ずることにする。

Ⅲ ¥

筆者は世界三大貨幣マークはイギリス・ポンドの£とアメリカ・ドルの\$と日本の円の¥であると信じて疑わないのである。世界的公認をうけているかどうかにかかわらずにである。江湖^{コウコ}の賛同を得るものと思う。

そこで世界三大貨幣マークの£ \$ ¥とに共通点のあるところを指摘したい。

そのデザインの姿が優雅にして端麗であり気品にみち高い。更に土台とでもいうか基本にアルファベット文字が使用されている。それもその文字がそれぞれの貨幣名に直結しないという不思議さも共通しているのである。

これから円のマークであるㇿに論述をしぼりたいので、ここではポンドの£とアメリカ・ドルの\$について探求の成果のみを紹介しておこう。もとよりその詳細や異説等については拙著『ㇿの歴史学——貨幣に秘められた謎を解く』（東洋経済新報社刊。2001年）を参照をねがいたい。

先ずポンドの£なのだが、その£（エル）はなんと古く古代ローマ帝国がブリテン島＝イングランドとスコットランドを占領していた時に使用していた重量測定の基本単位であるリブラ *libra* のエルなのだ。ついでドルの\$は可成り複雑なプロセスをふむのだが、要するにイギリスからの独立を願うアメリカが、イギリスの重商主義政策によってアメリカで流通するイギリス通貨の決定的不足を救ったものが、スペイン領メキシコで製造のメキシコ・ドル銀貨だった。この銀貨の正式名はペソ *Peso* である。例えばそのペソ貨6枚を入手した人は文書に *Ps.6* と記すのだが、時の経過とともに逆転して *s* が大きくなり *P* が二本の縦線化して\$になったという次第。

さてついでㇿの登場ということであるが、一見これは簡単そうに見えて実はそうではないという曲者^{クセモノ}なのである。一筋縄でゆくようなものではないことをこれから縷々^{ルル}説明申し上げよう。

読者には不可思議に思われるかも知れないが大正生れという昔人間は小学校で国語の教科書や書類で次のような文章を読まされていたのである。恐らく現代人には読めないだろうと思われる文字には（ ）つきで補足しておいた。

タラ（ろ）ウサントアソビマセウ（しょ）。 ノニハテフテフ（ちょうちょう）ガ、カハ（わ）ニハドゼウ（じょ）ガキマス

といったようなことで、尋常小学校生は大変な苦勞!?をしていたわけである。

この点、イギリスの子供はもっと苦勞しているのではなからうかと同情!?しているのである。というのも例えば *a* では *make* メ[・]エ、*January* のジ[・]アヌアリィ、

James のジエイムス等のア・エ・エイ。u では ultra のウルトラ, uncle のアンクル等のウ・ア。o では on のオン, school のスクール, out のアウト, 等々のオ・ウ・ア。それだけではない。例えば a の発音がア行の枠内で変化する発音ならまだしも——それでも吾々には難しい——, そもそも o には見当もつかない上述のオ・ウ・アのア行からも遊離している one ウンがあるのだ。これが全く分からないだけにイギリスの子供に同情^{ヒトシオ}入なものがあるわけである。眞偽については完全に不確なのだが, 日本人がはじめて英語に接した時, 先生役が弟子にオネ one ・ ツォ two……と発音したとか。わからぬでもない。

このような無用にも近い苦しみから子供をまぬがせるためになされたわが国の改革が言文一致の大原則の樹立である。現在は言文一致の文章の世の中である。但し例外のない原則なしといわれているように, 主語になるものにつける「は」は=わ!! 「わ」と発音し, 方向を示す「へ」は「え」とする例外は残存することになった。

言文一致の大原則はローマ字表記にも妥当する。当然のことである。したがってわれわれの現代のテーマたる円のローマ字表記は EN であって, 当然ながらそれは必要にして十分なものである。

一般並みの解説に見られる, 𠄎はローマ字表記の Yen の Y をもってきたものだと安易な思考は根本から成立しないのである。だがここでこの安易な思考者を突き放すだけが能ではないので, ひとつの助け舟を出しておこう。それは円貨史上の一つの史実である。

明治2年7月——この時点は本稿では特別の意味をもつので銘記ありたい——のこと, 新貨幣名の円の決定のもと, 彫刻の名人として造幣局^{ショウヘイ}に招聘されていた加納夏雄は一円銀貨の図柄を思考していたのだが, それにはなんとローマ字で明白に ONE YEN として Yen と銘記していた。なぜなのだろうか。

この疑問には二つの原因がある。一つは EN の二文字よりは Yen という三文字構成なら, そこには落ちつき=安定感と立体感があるとの主張もありうるだろう。とすれば, 実は細いことをいうようだが円のえはア行のエではなくてワ

行のエなのである。したがって三文字でのローマ字表記では当然に Wen であるはず。踊りのおもワ行のヲである。京都は祇園（町）甲部の風物詩にもなっている都踊りも「都をどり」と意識して表記しているわけである。歴史を尊重すればこのようになるわけである。

もう一つのものは EN の表記では外国人に正しく「エン」と発音されると同時に「イン」と間違えられる可能性も十分にある。誰も English を^{イン}グリッシュとはよまないだろう。これを避けるためにあえて YEN にしたことも考えられる。ただし外国人向けの便法がそのまま現在では発音され、注意して聞いていると単純に「エン」というよりは「イエン」との発音の方が多いのである。これらの問題にも答える意味において、改めて根本から YEN 表記の根拠をさぐってみることにしよう。

幕府政権と明治新政権の政権上の移動があったり、旧江戸城内における二度の火災によって明治初期の重要文献が^{インメツ}湮滅したために貨幣名の円の成立の詳細がわからないのだとの説を耳にして考え込んだのだが、政権は不変＝持続しており、また日本と密接な関係にあったイギリスに、ヒョットしてその文献があるのではなかろうかと思いついたのは昭和 53＝1978 年の早春だった。

同じイギリスに行くのなら同時に次の疑問の解明に役立つものも知りたいと思った。日本に長期滞在中に日記を書いたり、帰国後に日本に関する著述をした人物にオールコック、サトウ、ハリス、ペリー等がそれらの記述に江戸のことを Edo ではなくて Yedo と書いているが、その理由は何なのかを明らかにしたいと考えた。

このようなわけで二つの課題をもって早速にロンドン西郊のキューガーデン（植物園）やヒースロー国際空港の近くにある公文書館に交うことにした。公文書館は当初ロンドンの都心にあったのだが、所蔵文書の増大と日常業務を果すには手狭状態になり、1978 年にロンドン西郊の新館に移転し、旧館はそのまま、史上で有名なもの、例えばマグナ・カルタを公開するなどの、展示館として活用されることになったようだ。

ロンドンの西郊地帯では地下鉄も地上に出ており、その最寄りの駅で下車し、ヒースロー空港への発着する飛行機の音を頭上にしながら、新館の公文館に行った。それは真新しい白亜の殿堂というよりは城塞と表現した方が似合う頑丈で壮大なものだった。

因にキュー・ガーデンでは親鴨が十数羽の子鴨をつれて長くなりながら一直線に堂々と人おじすることもなく歩くというホホえましい光景を見た。木には栗鼠^{リス}が走り廻り可愛い手で木実を食べている姿を見たのを思い出す。イギリスでは人間と小動物とが仲間として共存していることを知って祖国における現状にしばし思いをはせたことだった。

新公文館では業務開始早々ということもあってか極めて丁寧に迎えてくれて恐縮するほどであった。大英博物館では一冊の書物を半日以上を待ってやっと読んだ経験もあり、もしやして此処も？となかば覚悟していたのだが、やはり誇るべき新館だけに、すべては近代化され、申込んでから5～6分で机上に届けられて嬉しかった。以下に成果を述べておこう。但し課題の一つの貨幣名円についての文献そのものは残念ながら見当らなかった。

「Japan」＝「日本」と書かれたシールの張られている公文書の膨大な数冊のファイルを順次調べたところ、1854＝嘉永7年8月に日英和親条約の締結・調印に来日し、同年9月に江戸から本国政府に報告を発信した東インド船隊司令官スターリング J.Stirling は、それに江戸のことを Jeddo と表記していることを発見した。

1858＝安政5年に来日、7月に日英通商条約に調印したインド総督エルギン卿も、この件で本国政府への報告書で江戸のことを終始 Jeddo としたためている。

この二例は江戸からロンドンへのものだが、その逆も全く同じことであるのみならず、その総仕上げ、つまりイギリスでは江戸はジェッド Jeddo だったことを絶対的に証明するものを公文書の中に発見することができた。1859＝安政6年10月29日、ヴィクトリア女王＝イギリス政府が発行する日本国元首＝將軍あての 駐日イギリス公使としての R.オールコックに対する信認状 credentials

において江戸を Jeddo と明記しているのである。

ジェッドとは 俺のことかと 江戸はいい
というところだが、なぜ江戸が Yedo の前に Jeddo あるいは Jedo だったのか。この問題の追及過程で次のことがわかってきた。

江戸時代の日本の特徴の一つは鎖国である。オランダ・中国・朝鮮以外のすべての国は排除された。そのオランダも長崎の出島という名の距離された土地に貿易用の商館をもつことを認められた。

1690＝元禄 3 年にこのオランダ商館付きの医師としてケンペル E.kaempfer が勤務し、1692 年には離日した。彼は在日中に 1691 年と 1692 年の二回にわたり参府＝公用で江戸まで旅行した。将軍にも会い奥女中のために相互の挨拶や踊りも見せ、いわば見せ物扱いをうけた。ただし彼は平凡な人物ではなかった。参府のための道中での見聞はもとより、広く日本の自然・社会を科学的に観察・調査し、帰国後その成果によって、有名な『日本誌』を書き上げたのである。

『日本誌』はその後印刷されることもなく、更にケンペルの死去によって遺稿となってしまった。ところがここに一つの運命的な出会いがあった。いわゆる目の高いことで有名なコレクター——なればこそ後の大英博物の生みの親にもなるのだが——であるハンス・スローン卿 sir Hans Sloan がこの遺稿を買上げるのみならず上梓までしたのである。

ここでは是非ともケンペルの身上についてふれなくてはならない。実は幕府の目をゴマカスためにオランダ人医師としてオランダ商館に着任したということにしたまでのことにすぎず、彼は歴^{レッキ}としたドイツ人だったのである。したがって当然のことではあるが彼の原稿の『日本誌』はドイツ語で書き上げられていた。したがってスローンは原稿文を英訳して上木したわけで、この英語版『日本誌』は本書の第 1 号の印刷本である。1727 年である。因に英語版よりおくれること 50 年の 1777 年にやっと原語版の『日本誌』(“Geschichte und Beshreibung von Japan”)が刊行された。

英語版『日本誌』は鎖国中の神秘国として知られていた日本に関する確実に

して豊富な情報源として、数多くの文化人に迎えられ^{ムサボ}貪り読まれた。その中にはカント、デイドロー、ゲーテ、フィヒテ等といった超一流人の名前もある。しかもそれにとどまるものではなかった。1975＝昭和50年にイギリスの国首として初訪日のイリザベスⅡ世女王は、その挨拶の中で「私達はズーと以前からお国（日本）のことをよく知っています。それはケンペルの著書によってです」の言葉が口から出てきたのである。

スローンは『日本誌』の印行するにあたりドイツ語と英語とに通じている人物として、ロンドンで開業している、王室学士院の会員でもあったスイス人医師のJ.C.ショイヒツァに依頼して、ドイツ語の原稿を英訳させてこれを版行したのである。仮りに彼が如何に語学の天才であったとしても、彼の周辺に誰一人として鎖国中の日本に在住した者などいない条件下では、その英訳に^{オノズ}自から限界が生じ、特に物品・土地の名前にはお手上げだったろうと思われる。

恐らくケンペルは江戸に来てその都市名の発音を何度も注意深く耳にして、最終的にこれをドイツ発音で^{エド}Jedoと表記した。ケンペル苦心の創作といたい。無知を公開!?することになるが欧米では日本はJapanとのみ表記されているものばかりと思っていたのにイタリア旅行時に、その地では^{ジアップネ}Giapponeと表記することを知って驚いた。これもイタリア人の苦心の作であろう。ケンペルの同類の表記に^{エビ}Jebi＝海老・^{クワン}Quan ^エJe＝寛永等がある。

これらの人名・地名・物品名等はショイヒツァー英訳作業においてもそのままの素通り・V.I.P.扱いである。ケンペル創作のJedoが疑念もなくひろく採用されて英語よみで^{ジェド}Jedoが公式の江戸の表現・発音になったという次第である。ところが幕末になるや数多くの日本からの帰国者・在日中の人々の口口から体験にもとづく正確な発音はジェドではなくてエドであると異口同音の訂正案がよせられ、それによって正式にJの音質＝声値の近似音としてのYが採用を、Jedo→Yedoになったというわけである。

上記の決定が一つの契機になって、日本語のエエ（ア行・ヤ行・ワ行）はローマ字でYeと表記するようになり徐々にその輪を拡げることになる。

イギリス自身の公文書におけるこの第1号になると思われるものは『1857年——1859年の中国及び日本へ派遣のエルジン卿特別使節に関する文書』（1860年）に第200番として綴りこまれている通商條約条文およびその説明文中のすべての江戸の表記は Yedo となっている。

当然、在日中のイギリス人は、日本語のエエを ye と表記し、日本人も無条件でそれに習った。そしてそのエ（エ）が文頭は勿論のこと、文中・文尾にあってもそのすべてはお構いなく ye で表記した。例えば長崎流写真の開祖と自称する上野彦馬は、自分の撮った写真を客人に渡す場合につける表紙つき台紙に、彼の責任の存在を証明するためにも自信のほどを示すためにも、自分の姓を Uyeno と表記した。

このような数多くの事実を背景にして、それを集大成するとともに権威づけ普及を果すことになるものとして慶応3=1867年刊行の『和英語林集成』が登場する。そこではエ（エ）ではじまる日本語は Ye の項にまとめられている。他に Abura Ye 油絵・Akagayeru 赤蛙にみられるように文中・文尾の場所にかかわることなく上野彦馬同様に、すべてが ye で表記されている。

これをもとにして、いよいよ課題たる円の Yen 表記・その Y をもとにするマークの¥の登場となるわけである。ここで多分読者が持たれる疑問として、新貨幣名としての円の出現時=明治2年現在で、どうして円が同時に YEN と表記可能だったのだろうかと思われるのではと考えるのである。それが可能だった証明になるものが、これまた不可思議と表現したくなるのを禁じえないのだが、大阪の造幣局附属の造幣博物館には、他でもない上記の『和英語林集成』そのものがお雇い外人として造幣首長に任じられ、そして本来の造幣局長以上に振舞ったキンドル——そのキンドル=金に対して横柄に取扱われた日本人の造幣局長にギン（銀）ドルとのニックネームが献じられたとか。——愛用との説明つきで展示されている。したがって加納夏雄などから円のローマ字表記の質問をうけて『和英語林集成』をくっているキンドルの姿が見えてきそうである。云いかえると加納夏雄の一元銀貨図案に円=YEN のある必然性がわかるということ

である。もとよりこの辞典の刊行年からいって貨幣としての円=YEN の存在しないことは明白である。ただし円に通じる同発音の縁——文字通りエンがあった!!——は存在していたことをいいそえておこう。この和英辞典を見た時に、問題意識があれば解決の鍵は見つかるもので、なければ見逃すものだと悟ったこと思い出す。

要するに Yen は Yebisu ビールとともに幕末・明治初期のローマ字化石なのである。笑っていただきたいのだが、ヒョットしてとの思いから東京は山ノ手線のエビス駅と上野駅に行き駅名表示板のローマ字表記まで確めに行った。結果はガッカリ!!

YEN の Y が土台になって¥マークになったのはその通りなのだが、これが政府なり当局の決定・公定によるものでないこと・民間で自然発生的に形成されたものであることに気づく必要がある。そして民間では広く愛用されたものであることは喋喋無用のところであらう。このことは通貨たるコインや日本銀行券・政府紙幣には用いられていないことでもわかるはずである。ただしこの原則の唯一の例外といえるものがある。十五年戦争こと第2次世界戦争は敗戦で終結したから当然のことなのだが、政府関係のもの・公共的なもの=銀行券・



国会議事堂を図案にした10円札

郵便切手等の印刷をしていた大蔵省（現財務省）印刷局はアメリカ軍の飛行機 B29 の空襲で焼夷弾の絨緞爆撃をうけて印刷局能力を完全にうしなってしまった。ために戦後の印刷には民間印刷会社の能力に依存せざるをえなかった。昭和 21 年に発行された国会議事堂札——無用なことながら左の国会議事堂の図柄を囲む縁取りが米に見え、右の十円という通用金額表示のための四角の鎖状のデザインが口（クニガマエ）に見え、これは「米国」とよめてなさけないではないかと国会で議論されたとか聞いている——は製図の段階から、ということは全面的に政府ではなくて民間の凸版印刷会社の手によるものだったためと思われるのが、右の金額欄の左下の隅にㄥ10 としてㄥが使用されている。ㄥの愛用・愛着のあまり無意識に当然とばかり使用したもので、意図的なものとは思えないのである。

ついでながら鎖国以前にも幾人かの宗教関係を中心にする来日者があった。彼等は当然ながら、例えばアビラ・ヒロンは江戸のことを Yendo と表記しており（『日本王国記』1615）、同じころ江戸にあった J.セーリスは Edoo と聞いたとしてその通りを文字化した（『日記』1900 年刊）。

それはそれとして、これに関連するいわば円の Yen 表記の異説を紹介して本章を閉じることにしたい。既述造幣首長のキンドル等とともにお雇い外人のひとりとして明治 3 年に大学南校の英語教師になったチャールズ H. ダグラスがいた。その後明治 4-8 年には米沢の藩塾たりし興譲館が廃藩置県で改組されて英学舎になるのだが、彼ダグラスがそこの教師として勤務した。その時授業中の東北訛りの生徒の言葉から次の発見をした。

東京では完全に消失していた「イ」と「ㄥ」の区別がこちらでは健在であった。しかし「エ」と「ㄥ」の区別はないものの、ヤ行の音が前にくると「ㄥ」がはっきり発音される。だから例えば越後の場合 Yechigo と書くのがよい。Echigo と表記すれば「イチゴ」と発音するだろう。かくてダグラスは指摘するという「ジャパン・マネーの円は En ではなく Yen と書く。このスペルをきめたのは、もしかすると東北の人かもしれない」と（池内紀「明治五年の英語発音

書」——『本』講談社 PR 誌 2003 年 2 月号)。まことにユニークな Yen 異説である。但しこの異説は残念ながら成立しない。というのは加納夏雄の一円銀貨の図案の成立が明治 2 年だからである。